

「シャマンの神話」ー トウングース的な一説話について

荻原真子

キーワード：シャマンの神話、口承文芸、ウデゲ、オロチ、エヴェンキ

シベリアの先住民諸族のもとで採録され、公刊されている口承文芸のなかに「シャマンの神話」(шаманские мифы : shamans' myths) が区別されていることがある。一般にシベリアの口承文芸のさまざまなジャンルの説話に登場する人物や世界はシャマニスティックな特徴をもっている。シャマンが登場することは勿論で、特に、女性のシャマンの活躍や役割はある共通の傾向を示しているように思われる。また、人々の記憶に在る特定のシャマンについての人物伝、その事績を内容とする説話も少なくない。このようにシベリアの諸民族の口承文芸はシャマンやシャマニズムの観念、表象と深くかかわっている。そのような中で殊更に「シャマンの神話」という区別がなされているとすれば、それは具体的にどのような突出した属性が指標になっているのであろうか。

しかしながら、「シャマンの神話」として挙げられている説話は必ずしも多くはなく、また、シベリアの諸民族の口承文芸のテキストで一般的な区分でもない。つまり、各民族の口承文芸についてこの用語を見出すことには限界があるように思う。因みに、『世界諸民族の神話事典』では「シャマンの神話 (шаманская мифология)」は「儀礼と密接に結びついており、主として儀式の際に表される」としているが、それに続く説明はシャマンの三層世界、補助霊、イニシエーション、社会的機能、文化英雄との関係などシャマニズム一般についての言及だけで、具体的な例は挙げられていない [Мифы народов мира 2: 638]。穿った言い方をすれば、「シャマンの神話」という用語は研究者による恣意的な用法のように思われなくもない。しかしながら、実際に具体的な例があるなら、それを検討してみることは必要である。本稿では、「シャマンの神話」として挙げられているウデゲおよびオロチのテキストを手がかりにこの問題を考えてみたい。

I 「シャマンの神話」ーウデゲの口承文芸から

V. K. アルセーニエフの採録したテキストのなかに「シャマンの神話」を考えるヒントになる話がある。これはアルセーニエフの文書資料中のテキストで、『ウデゲのフォークロア』に収録されている。

1) 「シャマンの7という数」

7人の乙女 (Нада одега) ¹ がいた。一番上の娘は誰にも何も告げず、黙って家を出ていった。朝に出かけ、夕べには帰ってきた。だれも彼女が怒っているのを見たことがなか

った。長いことそんな様子だった。6人の姉妹は姉について相談をし、確かめることにした。妹たちは姉が帰ってきたら、削りかけ (сиги)¹を火にくべて、みなで笑おうと決めた。夜に姉が帰ってくると、妹たちは決めたようにした。姉も笑った。そのとき姉の口のなかには毛があった。

夜明けに姉はいつものように出かけた。そこで妹たちはスキーを履いて逃げることにした。姉が戻ってみると、妹たちがみないなくなっているの、彼女は後を追いかけてながら、こう繰り返した。「ノグサ ウェムバニ ハグディ *Ногуса уэмбани хагды*」(妹たちのスキーの紐は切れる)。すると、本当に紐が切れ、妹たちは動けなくなった。そこへ姉がやってくると、「わたしの許しなしにはどこへも行けはしない」と言った。それから彼女はみんなを喰った。妹たちの魂は上のほうへ飛んでいき、星になった²。姉は強いセウォン *севон*³で、やはり天へいった。この7という数はシャマンの全部の話や持ち物に表れる [Фольклор удэгейцев:478]。

この話ではシャマンにかかわりの深い7という数が印象的であるが、テーマは何であろうか。話の筋立ては単純である。すなわち、7人姉妹のなかの長姉が謎めいた行動をするために、6人の妹たちがその理由を明らかにしようとして、笑いを誘う。笑った姉の口のなかには毛があった。翌朝、妹たちはスキーで逃げ出すが、追跡してきた姉の呪文によって、スキーの紐が切れ、動けなくなった妹たちは姉に喰われてしまう。妹たちの魂は天へ飛んでいって、星になり、姉もまた天に昇った。姉はセウォンであった⁴。セウォン、セウエンとはウデゲばかりでなく、トゥングース諸語に共通する語で、シャマンの補助霊をいう⁵。

この話が「シャマンの神話」であるとするなら、その特徴は「妹たちの魂が」昇天して「星になった」とする、星座の起源を説くところにあると考えてよからう。7という数がシャマンにかかわるといふことはこの話では必ずしも明瞭ではない。テキストについて言えば、笑い、人喰い、呪文、スキーが主要な要素であるが、そもそも、長姉が人喰いになる(もしくは、人喰いである)のは何故なのか、何故妹たちを犠牲にしたのかが謎である。そして、何よりも、これが「シャマンの」神話である

¹原注 ナーダ オデガ=7匹のオオカミ

²原注 細長いエゾノウロミザクラの削りかけ。かつて綿や布の代わりに、女性たちが日用とした。これをつくるには径2,3cmの細い枝を水に漬け、次いで凍らせ、凍った状態で削った。

³原注 これはブレアデスカ、大熊座などの星座

⁴原注 正確にはウデゲ語で сэвэ (セウエ) = シャマンの補助霊

⁵ この話はトゥングース諸語で共通しており、その第一義はシャマンの補助霊であるが、各言語における派生語や方言には補助霊の偶像、供犠(物)などを示している。典型例を挙げると、エヴェンキ語 сэвэк、ソロン語 сэву、エヴェン語 һэвук、ネギダル語 сэвэхи、オロチ語 сэвэ(н)、ウリチ語 сево(н)、オロッコ語 сэвэ、ナーナイ語 сэвэ などである [Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков 2 : 135]。

ということは何に依拠するのであろうか。

ウデゲには、もう一話、次のような説話がある。

2) 「ネングイ (нэнгуй)」⁶

昔、ずっと昔のこと、7人の乙女がいっしょに暮らしていた。たくさんの男たちが結婚を申しこんできたが、頑として嫁にいこうとはしなかった。一番上の姉は毎日どこかへでかけたが、ほかの妹たちは姉がどこへいくのかを知らなかった。姉は黙って出かけては、黙って帰ってきた。あるとき、姉はいつものように出かけた。残った妹たちは、姉がどこへいくのかを突き止めなければならないと話しあった。「彼女が帰ってきたら、何かをやって笑わせましょう。彼女が出かけるようになってから、独りっきりになって黙り込んでいくから。」娘たちは相談をして、姉が帰ってきたら、一番下の妹が下着を脱いで、それを火のなかに投げ込むことにした。そうすれば、黙りこくって暗い顔をした姉を笑わせることができるはずだというのだ。姉が夜になって帰ってくると、妹たちは話し合ったとおりにした。みんな笑い、姉も笑おうとしたが、唇を少しあけて微笑した。すると口のなかには毛が生えていた²。妹たちはびっくりして、ふざけるのを止めて寝た。

彼女たちが朝目ざめると、姉はもういなくなっていた。彼女たちは、姉はきつと人喰いなのだと話しあった。そして、家から逃げ出すことにした。彼女たちはスキーをつくって、森へ逃げた。夜に姉が戻ってくると、家には誰もいなかった。そこで彼女は妹たちを追いかけ、追いつくと6人全部を喰ってしまった。それから谷地坊主のある沼に小さな小屋を建て、そこで6人の子どものネング、つまり、赤オオカミを産んだ。そのときから、このオオカミが森のなかを走り回っている。

(この話をウデゲたちは夜には決して語らない。昼間だけだ。かれらはこれが一番怖い話だとみなしている。) [Фольклор удэгейцев: 477-478]。

この説話は1)の説話とほぼ同じであるが、違っているのは姉が妹たちを喰べたあとの、結末である。妹たちは姉によってネングイ=赤オオカミとして再生し、森のオオカミとなったという。これに対して、1)の説話では星(星座プレアデスか?)になる。仮にこの2)の説話が森の赤オオカミの由来を説いていると解するなら、この話もまた「神話」とみなしてよいように思われる。しかしながら、『ウデゲのフォークロア』の編者は2)のテキストを「スカースカ」(昔話)とみなし、1)のテキストは「シャマンの神話」であるとして、この点について、次のように記している。

⁶原注 Nengui 正確には Nengu。「オオカミ」の意。ウデゲのフォークロアでもっとも古い登場者のひとつ [Фольклор удегейцев: 488]。同じ話は「7匹の魔物」として近年にも採録されている [風間 2004: 36-49]。

この二つの説話は「同じ神話的なテーマの異伝である。…、起源的な結末が異なる…、テキスト 110 (すなわち、1) の説話 筆者) は天地開闢の神話に近い。…、従って、厳密に云えば、この説話は「シャマンの神話」とするべきであろう。…、このようにウデゲの昔話と神話との境界はまだきわめて不明瞭である」[Фольклор удэгейцев: 508]。

このような指摘はどのような意味をもっているのでしょうか。それが正当なものであるのかどうかはどのように判断されるのでしょうか。そして、何よりも、これが「シャマンの」神話であるという根拠はどこにあるのだろうか。仮に、伝承者であるウデゲの語り手の立場を考慮するなら、上の2つの話は異なる性格のものとして認識され、区別されるのであろうかという疑問も湧いてくる。

II オロチの類話

さて、ウデゲの「ネングイ」「シャマンの7という数」に類似の説話がオロチにある。V.A.アヴローリン・E.P.レーベジェヴァの『オロチの昔話と神話』には「シャマンの神話」として4話が収録されており、その1話は次のように語られている。(この話は多少長いので、要点を【 】に示した。)

3) 7匹のオオカミ

① 【7人娘、姉は人喰いの魔物。6人はスキーで逃げる。】昔7人の娘が暮らしていた。6人は天にいて、一番上の姉は家にいた。あるとき、6人の美女は地上の家に帰ってきた。姉は眠っていた。そこで、一番下の妹は自分のお尻に炭を塗って、占いをはじめた。すると姉は笑った。その口には人間の肉が見えた。妹たちは自分たちのスキーをつかんだ。一番下の妹のスキーのひもは鉄でできていたが、姉たちののは魚皮だった。一番下の妹は袋のなかに一握りの灰を入れ、石と櫛をつかんで、走りだした。

② 【姉の追跡、呪文で妹たちのスキーの紐が切れ、喰われる。末の妹の呪的逃走(灰→霧、櫛→森、石→絶壁)。川の老婆が脚を伸ばして川を渡す。】6人みなで逃げたが、7人目の、一番上の姉は魔物になった。彼女にはスキーがなかったのだ。姉は大きな声で「妹のスキーの紐、切れろ」と叫んだ。スキーの紐が切れた。その妹が紐を直している間に、姉は彼女に追いついて、喰ってしまった。姉は先へ進んだ。「妹の紐、切れろがいい！」紐は切れた。姉は2人めの妹に追いつき、喰った。喰ってしまうと、先へ進んだ。(こうして姉は5人の妹を喰ってしまった。)

最後の妹だけになった。彼女は灰を投げて、「濃い霧になれ」と云った。そうして先へ進んだ、長いこと。すると、姉が大声で、「妹の紐、切れろ」と叫んだ。歩きながら、今度は櫛を投げた。「櫛よ、櫛、うっそうとした森になれ！通り抜けられない密林になれ！」先へ進んでいくと、聞こえてきた。「妹の紐、切れろ！」そこで妹は石を投げて、「石よ、石、絶壁になれ！」先へ進んだ。川向こうにお婆さんがいる所にやってきた。

「お婆さん、私に川を渡らせてくださいな。」お婆さんは「わたしは犬に餌をやってるの」と答えた。「お婆さん、急いで渡らせて。」お婆さんは「待っといで、これから料理をするから。」「お婆さん、早く！」お婆さんは「待っといで、さじを舐めるから。」ようやくお婆さんはやってきて、自分の脚をこちらの岸に伸ばした。美女はお婆さんの片足に這い上がった。お婆さんは脚を引き寄せて、彼女を渡してくれた。美女に食事を与えて、かくまった。

③ 【人喰い魔物の転生(谷地坊主、草、障害物、小石、赤石、青石、蚊とブヨ)】そこへ姉の魔物がやってきた。「ばばあ、わしを渡せ！」お婆さんは「わたしは犬に餌をやってるの」と答えた。「お婆さん、あれはわたしを追ってきた魔物よ。」「ばばあ、わしを渡せ！」お婆さんは「待っといで、これから料理をするから。」「ばばあ、わしを渡せ！」お婆さんは渡しに行った。片足を伸ばして、こう云った。「わたしの足の親指にのりなさい。」親指にのった。お婆さんが脚を引き寄せると、魔物は水に落ちて、流されていった。

魔物は泣きだして、「わしの頭よ、谷地坊主になれ。髪の毛よ、沼地の草になれ。骨よ、川の障害物となれ。両目よ、小石になれ。わしの血よ、赤い石になれ。膿よ、青い石になれ。わしの遺骸よ、蚊やブヨになれ。」

この説話の後半は「7匹のオオカミ」の話である。その概略はこうである。

美女をかくまってくれた老婆(川を渡してくれた老婆であるのか、接合した別話での老婆かは定かでない)がいつときは美女をかくまってくれる。その息子たちはオオカミである。オオカミの家から逃げ出した美女はカシドリに変身して逃げ、ある勇者(メグゲ)の所にたどり着いて結婚する。やがて、子どもが生まれ、その子に7本の歯が生えたとき、美女は「7匹のオオカミが襲ってくるので、狩りに行かないよう、家に留まるよう」と夫に告げるが、メグゲは聴き入れず、戸口の地面に7本の矢を突き刺して、出かける。それは7本のポプラの木になる。果たして、7匹のオオカミがやってくる。美女は煙穴から飛び出すが、オオカミは息子を喰ってしまう。美女は太い木の上にいるが、オオカミたちはその木をかじって倒す。彼女は次々と隣の木に飛び移りながら、カラスやワシに夫のもとへ危急を知らせるように頼む。最後に、ワタリガラスがオオジカを獲って、皮を剥いている夫のところへ行って、事態を告げる。メグゲは妻のところへ駆けつけて、矢を放ち、7匹のオオカミを倒す。妻はオオカミの頭を切って箱に入れ、肉は煮る。息子たちの跡を辿って訪ねてきた母親の老婆にその肉を食べさせ、オオカミ息子の頭の入った箱をもたせる。家に着いて箱をあけると7つの頭はそれぞれの枕に並ぶ。老婆は「わたしは自分の子どもたちの肉を食べたのだ、なんという忌まわしいこを！」と叫んで、皮ひもで首をくくる [Аврорин и Лебедева 1966:204-206]。

さて、オロチのこの説話の採録者の注釈によると、前半の①～③)は「シャマンの神話」、概略を

示した後半は昔話（スカースカ）とされている [Аврорин и Лебедева 1966:226]。ところで、この前半は上に挙げたウデゲの2話の類話であるが、後者で不明瞭なディテールを明らかに語っている。その一つは、7人娘のうちの1人は地上の存在であるのに対し、6人姉妹は天上に由来していることである。地上の魔性の存在である長姉が人喰いとなって、天上からの妹たちを滅ぼすのである。ウデゲの説話では、はじめから7人姉妹が語られ、何ゆえに長姉だけが異質な存在であるかは謎のままである。（とはいえ、7人が姉妹なのか、それとも、6人と1人の娘なのか、実は問題である。）3つの説話に共通しているプロットは、娘たちがスキーを履いて逃げるが、追っ手の長姉の呪文によってその紐が切れ、妹たちは人喰い姉の餌食になる点である。オロチの説話で明らかになっているもう一つのディテールは、末妹が呪物によって姉から逃れ、老婆の助けで川を渡るが、人喰いは溺れ、その身体から鮎物や蚊やブヨなど数多のものが生ずるという点である。「わしの頭よ、谷地坊主になれ。髪の毛よ、沼地の草になれ。骨よ、川の障害物となれ。両目よ、小石になれ。わしの血よ、赤い石になれ。膿よ、青い石になれ。わしの遺骸よ、蚊やブヨになれ。」ここまでくると、この説話が「シャマンの神話」であることにおぼろげながら思い至る。そのことは、エヴェンキで採録されている類似の説話によって傍証できよう。

III エヴェンキの「シャマンの神話」－「ヘラダン」

G. M. ヴァシーレヴィッチが編集した『トゥングース（エヴェンキ）フォークロア資料集成』（1936）で「神話」に分類されている説話のなかに「ヘラダン」という話がある。これは、エニセイ川中流左岸に当たるシム川流域のエヴェンキのもとで採録されたもので、その語り手はシャマンの家系に属する。ヘラダンというのは、川の氷に髭をとられ、人質を約束した老人の5人娘の末娘の名である。彼女は氷の虜となって、川を流されていく。その途中で、自分の行く先をシャマンのお婆さんたちに尋ねるが、最初のお婆さんは「太鼓を2つもっているお婆さんが」、その2人めは「太鼓を3つもっているお婆さんが」知っているかもしれないと答える。そして、その3つ太鼓のお婆さんは、「氷はおまえをシャマンの大地の真中（終点）に連れて行こうとしている。氷はおまえを騙そうとしている。決して振り向いてはいけない」と告げて、2本の錐を与え、それで川岸に飛び移ることを教える。ヘラダンをのせた氷は流れながら歌を歌う。

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。染め粉をつくる石が見えるよ。」

「見ないわ、死人の額が石に見えるのよ。」

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。砥石が、砥石が見えるよ。」

「見ないわ、死人の脛骨が砥石に見えるのよ。」

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。黒い染め粉が見えるよ。」

「見ないわ、死人の便が黒い染め粉に見えるのよ。」

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。赤い染め粉が見えるよ。」

「見ないわ、死人の血が赤い染め粉に見えるのよ。」

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。皮なめし具が、皮なめし具が見えるよ。」

「見ないわ、死人の背骨が皮なめし具に見えるのよ。」

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。皮裏をこそげる削り具が見えるよ。」

「見ないわ、死人の骨盤の孔が削り具に見えるのよ。」

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。砥石が、砥石が見えるよ。」

「見ないわ、死人のくるぶしが砥石に見えるのよ。」

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。茶碗が、茶碗が見えるよ。」

「見ないわ、死人の頭蓋骨が茶碗に見えるのよ。」

「ヘラダン、ヘラダン、ごらんよ、ごらん、下を。火打ち石が、火打ち石が見えるよ。」

「見ないわ、死人の腕の骨が火打ち石に見えるのよ。」

この後、ヘラダンは岸に上がり、クマのところへいく。クマは「自分を殺して、その皮や内臓をどのように処置するべきか」を指示する。それがエヴェンキにおけるクマ儀礼となる [Василевич 1936: 33-40=荻原 1995: 231-235]。

この「ヘラダン」の話でシャマンの川のなかに見える諸物が死者の人体の各部位であるというこの一節は、先のオロチの説話で人喰いの人体が水にかかわりのあるさまざまな物に転生するというモチーフと重なりあっていると云えよう。つまり、オロチの説話で老婆が脚を伸ばして渡らせる川は死者の他界へ通ずる川である。これは正しくシャマンの世界観である。そして、老婆たちはその川の見張りなのである⁷。エヴェンキにおけるシャマンの世界観とは、すなわち、人生のあらゆる局面を靈魂の諸相として把握する固有の観念である。この世界に生まれくる子どもの靈魂の宿る空間は川の源流にあり、鳥や卵としてシャマンの樹の梢に宿り、やがて女性の胎内に招じられて誕生する。病気や身体の支障は靈魂の一時的な不在や故障によって説明され、それに対処できるのがシャマンであり、その行為がシャマンの儀式である。人の死もまた、靈魂によって説明され、不帰の靈魂はシャマンによって死者の世界へ送られる。その道筋はまたしてもシャマンの川である。死者の靈魂を伴いゆくこの危険な旅路の川岸には幾人もの老婆たちが川守をしており、死者の世界の入口にいるのはその最年長

⁷ ポドカーメンナヤ・トゥングースカ川のエヴェンキのシャマンの世界観では死者の世界はシャマンの川の河口にあり、その先には9つの大地があって、そのなかのもっとも大きいのは冥界の主マンギの在所である。シャマンの川岸には7人の老婆たちが見張りをしており、シャマンは死者の靈魂を他界へ導く際に、この老婆たちに道を尋ねる。最年長の老婆は死者の世界の長であり、彼女は切り立った絶壁の上において、シャマンが送り届けてくる死者の靈魂を受け取るよう待ち受けている者に指示する [Анисимов 1958: 61]。

の老婆である。シャマンの世界はシャマンの川を軸と構成されている [Анисимов 1958: 56—88 ; 荻原 2001]。

このようなシャマンの世界観のなかに投影されている「ヘラダン」の説話が顔料となる鉱石や皮なめし具、砥石などの由来を語っているのだと見るなら、この説話が「シャマンの神話」であるということ認めてよいのではなかろうか。それはシャマンが登場するさまざまなジャンルの説話とは著しく異なる特徴を帯びている。

IV 7という数のつく説話 — もう一つの問題

上に挙げたウデゲの1)「シャマンの7という数」という説話は、オロチおよびエヴェンキに類話を辿ることによって、ようやく、「シャマンの神話」であるということに合点がいきそうである。そのことをもう少し、整理してみるなら、ウデゲの1)では、魔性の長姉に喰われてしまった6人姉妹が星座になり、長姉も天上に上るのに対し、オロチの説話では、姉妹は人喰い姉の犠牲になり、1人末娘だけは呪物によって危機を脱し、追っ手の人喰いは川に落ち、その身体の一部から谷地坊主をはじめ顔料となる鉱物や害虫などが生ずる。この話はエヴェンキの「ヘラダン」を照応することによって、そこに登場する川が「シャマンの川」、すなわち、シャマンの世界観における他界への川であることが想像される。こうして、手続きとしては迂遠ではあるが、ウデゲの1)の説話が、トゥングース系諸族に通低する「シャマンの神話」らしいことが推測できる。ただし、7という数がシャマンと密接にかかわりのある数であることの由来は相変わらず不明瞭である⁸。

ナーナイの口承文芸には「7人のプジンが暮らしていた」[風間 2005: 第4話]、「7人の兄弟が暮らしていた」[風間 2006: 第1話]などという説話が採録されており、それはオロチの「7匹のオオカミ」の後半に類似した魔物からの逃走譚である。この点について云えば、ウデゲの2)「ネングイ」では、姉妹に喰われた6人の姉妹は赤オオカミとして再生し、森を徘徊するという由来譚になっている。テキストでは「ネングイ」は赤オオカミとされているが、実際のウデゲ語では赤オオカミはジャグー(цэгу, オロチ語は *žaggy*) であるところから、ここでいう赤オオカミは現実の赤オオカミとは関係がないだろうという指摘がある [Фольклор удэгейцев:442]。この話が夜には語られないというのは、恐ろしい話だからである。そして、その恐ろしさとは、7匹のオオカミが、その

⁸ 7という数がトゥングース系諸族ばかりでなく、シベリアの諸民族の口承文芸に頻出することは確かである。例、西シベリアのネネツには7本の枝と7本の根のあるシラカバの樹(世界樹)が倒れ、幹からは血が流れ、それから水が流れ出し、あらゆる川を呑み込んだ。こうして大洪水が起こったという洪水神話がある。また、ガナサン(シベリア)の神話では死は地下界の白いトナカイと地上の暗色のトナカイが7日間闘った挙句に生じたという [Мифы народов мира т.2: 398-401]。

7という数に表されているようにシャマニスティックであり、しかも、邪悪で執拗なシャマン的な性格を帯びているためである。このように想定するなら、「7」を冠する説話とその流布について検討することもまた興味深い課題である。

文献

В.А.Аврорин и Е.П.Лебедева

1966 *Орочские сказки и мифы*, Новосибирск

А.Ф.Анисимов

1958 *Религия эвенков в историко-генетическом изучении и проблемы происхождения первобытных верований*. Москва-Ленинград

Г.М. Василевич

1936 *Сборник материалов по эвенкийскому(тунгусскому) фольклору*, Ленинград

Мифы народов мира т.2, 1982, М-Л

Фольклор удэгейцев: ниманку, тэлунгу, ехэ (Памятники фольклора народов Сибири и Дальнего Востока 18) 1998, Новосибирск

В.И.Цинциус

1977 *Сравнительный словарь тунгусо-маньчжурских языков 2*, Ленинград

荻原眞子

1995 『東北アジアの神話・伝説』 東方書店

2001 「鳥と靈魂--シベリアの生と死の民族誌から」『Science of humanity Bensei』(特集 日本人と日本文化の源流)(35)

風間伸次郎 採録・訳注

2004 『ウデヘ語テキスト (A)』(ツングース言語文化論集 24) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

2005 『ナーナイの民話と伝説 8』(ツングース言語文化論集 27) 千葉大学文学部

2006 『ナーナイの民話と伝説 9』(ツングース言語文化論集 32) 千葉大学文学部

(おぎはら しんこ・千葉大学文学部)

“Shamans’ Myth” – On a Type of Tungusic Tale

OGIHARA Shinko

Summary:

There is a classification of “shamans’ myth “ in the oral tradition of the native peoples of Siberia. The article takes this term of classification into consideration, analyzing some tales of the Udekhe and the Orochi. The comparison with a tale of the Evenks gives a rather concrete idea about the type of “shamans’ myth” that ispresumably common for the Tungusic oral tradition.